

## 寺田寅彦～定説・思い込み・気になること～（3）

四宮義正

77号に引き続いて寺田寅彦の作品や研究文献に関して、いくつか気になることを書いてみようと思う。

### 1. 『柿の種』のエピグラム

『柿の種』（昭和8年）の「自序」の後に下記の4行詩が置かれている。

棄てた一粒の柿の種 生えるも生えぬも 甘いも渋いも 畑の土のよしあし

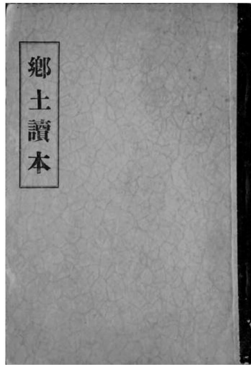
これを引用して、「人間は環境が大事で、努力すれば何事も成る」という方向へ牽引する教育家の文章を見かけることがある。しかし、柿が甘いか渋いは親からの遺伝であって土のよしあしではないだろう、ちょっとおかしいのではないか、と思っていた。

柿は寅彦の好物であった。母校の江ノ口尋常小学校から依頼されて『郷土読本』に寄稿した「郷土的味覚」（昭和7年）に留学中イタリアでの体験が書かれている。

その日の夕方、ホテルの食堂で食事のあとに出した菓物鉢くだものぼちの数々の菓物の中にただ一つ柿の実がのっかっていた。同時に食事していた客の誰よりも真先に自分のところへこの菓物鉢が廻って来たので、自分は遠慮なくこのただ一つの柿を取上げた。少しはしたくないような気はしたが、天涯の孤客だからと自分で自分に申し訳を云った。このローマの宿いっかの一粒の柿の郷土的味覚はいまだに忘れ難いものの一つである。

このような寅彦であるから、甘柿と渋柿が遺伝で決まることは知っていた筈で、敢えてこう書いたとしたら何故だろうか。

渋柿でも枝に残しておけば熟柿になって甘くなる。取り入れて靱殻の中で貯蔵すれば上手に熟柿にできるし、干柿にすれば甘味が凝縮する。また、アルコールや炭酸ガスで渋抜きしてもおいしく食べられるようになる。このような後手間も含めて「畑の土」と表現しているようにも思うし、あるいは単純に「遺伝もあるのですよ」と暗示しているような気もする。



『郷土読本』と『柿の種』表紙

### 2. 『土佐の書』掲載の寺田寅彦から津田青楓宛て書簡

高知新聞社から『土佐の書』という本が1975年（昭和50）に出ている。縦37cm、横28cm、帙入り、上製267ページでずっしりと重い豪華本である。タイトル通り長宗我部元親、野中兼山、坂本龍馬、山内一豊、山内容堂、武市瑞山、中岡慎太郎、牧野富太郎など高知ゆかりの109人の書跡が写真で紹介されている。そして寺田寅彦の毛筆書簡3通もある。宛先はいずれも津田青楓で、大正7年1月7日付、1月11日付、9月29日付である。翻刻は付されていないが、これらは寺田寅彦全集第26巻に収載されている。（書簡番号408、410、459）

写真の毛筆文字は素人には判読が難しいが、引き比べて読んでみると 408 の書簡で全集に欠けていると思われる箇所があった。

1 月 7 日（月） 津田青楓 消印午後 3 時—4 時

本郷区弥生町二より小石川区関口台町三四 津田青楓宛

謹啓 唯今御恵与の画が着きました。早速襖へかけて拝見しましたが、此れは大変に面白いと存じます。殊にあの粟と其穂にぶら下つて屈（み）る雀が大変に気に入りました。早く表装して掛けて見度くなりましたから此れからす（直）ぐに出掛（か）けます。表装は御相談の上の方がよいかと思もひますが、何分かうなると性急な話で一刻も早くし度くなりましたので、兎に角差出します。たしか本郷春木町辺に相応な経師屋があつた様な気がするから、其方を詮議して見ましよう。どうも大変に難有う御坐いました。なんだか愉快でたまらなくなりました。

右御礼まで。いづ（何）れ表装が出来たら見に来て下さい。草（早）々

一月七日

寅 彦

津田様

（注）下二重線部は全集の欠け部分、下単線部は修正部分、（ ）内は全集での記載。

全集版ではっきりしなかった出かける理由が補われたことになる。他の 2 通も数箇所文字違いでないかと思われるところがあるが欠けはないようである。なお、青楓は『寅彦と三重吉』（萬葉出版、昭和 22 年）で寅彦からの書簡を公開しているが、これには欠けは無い。

また 1968 年（新装版は 1986 年）に二玄社から発行された『文士の筆跡二 作家篇Ⅱ』にも大正 7 年 2 月 11 日付の津田青楓宛て毛筆書簡（418）が掲載されている。こちらは翻刻文も併記されている。

写真とはいえ、肉筆、特に毛筆の書簡をみると何とも言えない感動を覚えるし、より身近に寅彦が感じられる。津田青楓は画家であり寅彦の絵の先生でもあるが、この頃の絵画に対する熱中ぶりが伝わってきて面目躍如という感じがする。

また、寅彦は「津田青楓君の画と南画の芸術的価値」を書くなど青楓の絵について熱を込めて褒め上げていたが『寅彦と三重吉』に書かれている寅彦の絵や手跡、自分（青楓）の絵についてのコメントは冷静というか評価が低いようである。青楓は長生きしたので若い頃の仕事に飽き足らなくなったのかもしれないが残念な気がする。

### 3. テプラーの起電機について

寺田寅彦の研究は多彩で欧文論文は 211 編が全集の科学篇に収載されている。しかしその中で最も広く認められたのは、何ととっても 1917 年（大正 6）に学士院恩賜賞を受けた「「ラウエ」映画の実験方法及其説明に関する研究」である。これは岩塩などに X 線を当て、その結晶構造を解析したものであるが実験装置には苦勞している。

西川正治は「ラウエ斑点（談）」（『思想』、寺田寅彦追悼号、昭和11年3月）で「或る夕方南側の廊下を通っていると、テプラー起電機の置いてある実験室で、いつもそれが回っている時に聞える特殊のブーンという<sup>うな</sup>唸りとそれに混って一、二分毎に回転数を知らせるチンという<sup>ベル</sup>鈴の音が聞えるので誰かが電気の実験でもやっているのだろうと思って居た一」と述べている。

この「テプラーの起電機」とはどのような装置か気になっていた。最近ではインターネットを利用するとかなりの情報が得られるが、Wikipedia（ドイツ語版）によって人の名前であることが分かった。August Joseph Ignaz Toepler（アウグスト・テプラー）、1836年ドイツのブリュールに生まれた物理学者であり1912年ドレスデンで亡くなっている。1864年にシュリーレン法写真を発明したとのことである。起電機の図も掲載されていた。

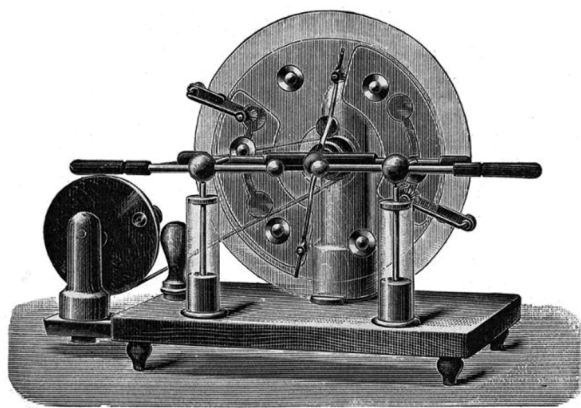


Fig. 304  
Toepler'sche Elektrifiziermaschine

テプラーの起電機 左右のライ  
デン瓶に正負の電気が蓄えられる  
(Wikipedia より)

起電機は詳しくは感応起電機であり現在は誘導起電機と呼ばれることが多い。静電誘導を利用して発電・蓄電する機械である。最初の静電発電機は摩擦で電気を起こす摩擦起電機であった。小学校で習ったエボナイト棒を毛皮で、ガラス棒を絹布で擦るとそれぞれ棒側がマイナス、プラスに帯電する現象である。その後、帯電した物体を近づけると接触しなくても相手側の近い方に反対の極性（正負）の電荷が集まる、という原理を利用して作られたのが感応起電機である。歴史的には1788年にニコルソンが起電機の祖と考えられている装置を作った。1864年から1880年までの間にホルツが製

作したホルツ起電機と呼ばれるものは、ガラスの円板が高速回転しながら固定円板に取り付けられた誘導子と相互作用する仕組みだった。1865年にテプラーが2枚の円板が1本の軸に固定されて同方向に回転する構造の誘導起電機を製作した。1883年には英国のウィムズハーストがホルツ起電機を改良して2枚の回転板が逆方向に回転する強力な起電機を作り出した。その後はもっぱらこの種の起電機が用いられるようになった。

日本では村岡<sup>はんいち</sup>範為がドイツ製クルックス管と印加する高圧電源として、島津で制作した直径約1mのガラス円板より成る大形のウィムズハースト起電機を使用して1896年（明治29）10月に初めて鮮明なX線撮影に成功している。寅彦による結晶の構造解析研究は1912年（大正元）～1913年頃と考えられる。図では円板が2枚のようであるが、テプラーはその後、60枚のガラス板を用いて6万ボルトの起電機を造ったとのことである。寅彦の使用したのはそのようなものかもしれない。以前に購入してあったものを利用したのだろうが、原理さえ掴んでおけばどうにでもなるという寅彦の面目躍如である。医科の方で不用になったX線管ももらってきたことも含めて、高田誠二のいう究極の「スマートな実験」かもしれない。